

ルソーの幸福観

佐々井利夫

はじめに

本紀要の前号でルソーの孤独の諸相に言及し、彼の孤独への傾向はその幸福観と関連している点を考察した。¹⁾そこで本稿では前号の考察をふまえつつ、ルソーの幸福観を彼の二三の作品を中心にして、その生涯との関わりをまじえて検討したい。

1. 二つの幸福

ルソー最晩年の書『孤独な散歩者の夢想』は、「こうして私は、いまや自分自身のほかには兄弟も、近しい者も、友も、付き合う相手もなく、この地上に一人きりになってしまった」²⁾ (Rêv., I, p.995.) で始まり、同時代人を告発糾明し続けた著者の戦い疲れた憂愁の心象を、読者に印象づけている。しかし少し読み進むと、そのような孤独者であることこそむしろルソー自身の望むところであり、「彼らと一緒に暮らしてどんなに幸せになれるかは知らぬが、一人でいるほうが、その百倍も幸せである」 (Ibid., p.998.) と、その状態を誇りにすらしているような表現がみられる。実際彼は、孤独な境遇こそ幸福であるとしばしば強調した。J.-L. ルセルクルの指摘するように、「彼の生涯における幸福な瞬間というのをひろっていくと、それらは孤独な状態に置かれている時」³⁾ という言い方もできるのである。別な書でも「真に幸福な存在は孤独な存在である」 (Em., IV, p.503.) 「一人になりさえすれば幸せなのです」 (Dial., I, p.816.) といった表現が繰り返されている。ルソーにおいては、孤独であることは必ずしも不幸ではない。

確かにルソーは、「孤独は生まれながらに好き」 (A Malesherbes, I, p.1131.) と、孤独への執着をよく語っているが、そのような執着とは正反対ともいえる自身の性向について、つまり他者のなかに居心地のよさを求める性向についてもたびたび語っている。しかし、実生活において、他者への愛着が裏切られるたびに (裏切られたと感じるたびに)、異邦人意識を増大させ、その一方で自分を容認しない他者の不当を責め、自らの正当性を強調した。⁴⁾したがって、ルソーが孤独であることを幸福だとことさらに主張する時期は、孤独を他者によって強制されている (強制されていると感じる) 時期と重なることが多いのである。ルセルクルも、ルソーが自分の孤独を称えている時期は、「大体において、迫害を受けているか、わが身の不幸の責任が他者にあるとしている時」だと指摘し、さらにルソー晩年の孤独は、「とりわけ彼自身の妄想によるもの」⁵⁾と断定している。

したがって、ルソーが追求めた幸福は、孤独であることを絶対的な条件としていたわけではないであろう。彼の思想においては、むしろ反対に他者の幸福のなかに自身の幸福を見い出だすという、いわば利他的な論理も強調されているのである。たとえば、初期の作品『人間不平等起源論』では、彼の祖国ジュネーヴへの「献辞」のなかで、「あなたがた

全員が、幸福であるのを眼にする幸福以外には、自分のためにさらに大きな幸福があろうとは予期していない人間」(Inég.,III, p.189.)と、自分自身を表現しているし、『新エロイズ』や『エミール』でも、「私以外の人々を犠牲にして成り立つ私の幸福、私の幸福を犠牲にして成り立つ他者の幸福、本当のところそのいずれが私にとって重要なのでしょうか」(N.H.,II, p.358.),「彼(エミール)の配慮が他人の幸福に捧げられれば捧げられるほど、それは一層知的な賢明なものになり、彼は善と悪について思い違いをすることが少なくなるであろう」(Em.,IV, pp.547-548.)と、幸福を語ることに於いて利他的な考察を展開している。

ルソーの幸福に関する論点はこのように、他者との関係を断ち切る孤独者としての幸福の追求と、一方において、他者の幸福のうえに自分の幸福があるとする利他主義者としての幸福の追求という二つの方向があるといえるであろう。

2. 「自然人」の幸福

まず、上述したルソーの幸福についての二つの論点を、自然人の幸福と社会人の不幸という対比的な描写のなかで検討していきたい。

ルソーが『人間不平等起源論』で「仮説的で条件的な推理」(Inég.,III, p.133.)として登場させた、非現実的存在ともいえる自然人は「わずかの情念に従うだけで、自分だけで充足」という「静かで無邪気な日々」(Ibid.,p.142.)を送る存在として想定された。自己充足の状態であるが故に「各人は束縛から自由」(Ibid.,p.162.)であり、孤独に生活することができた。理性や良心もなく、他者との依存関係もないというその状態に生きる自然人は、現実的人間存在の属性としての幸、不幸の感情からは無縁である。無縁ではあるが、ルソーはその状態を幸福のイメージで描写する。『政治的断章』には、「純粋な自然状態とは、地上における大多数の人間がもっとも悪意をもたず、もっとも幸福である状態である」(F.P.,III, p.475.)といった表現もみられるのである。

こうした自然状態から社会状態へ移行する中間の時期は、「もっとも幸福でもっとも永続的な時期」(Inég.,III, p.171.)だったはずだと、ルソーは推理する。「要するに、人間が一人でできる仕事、数人の人の手の協力を必要としない技術だけに専念しているかぎり、人間の本性によって可能なかぎり自由で、健康で、善良で、幸福に生き、おたがいに独立した状態での交際の楽しさを享受し続けたのであった。」(Ibid.)この文章は、ルソーの生き方においても、思想においても重要な意味をもっているとえるであろう。たとえば、ルソー自身、実生活において自立した職業として楽譜筆写の仕事を選んだこと、無名時代に初対面の貴族ブザンヴァル夫人から食事を配膳室でするようにいわれて立腹したこと(Conf., I, p.289.)や、リュクサンブール元帥のように身分の高い人との交際において対等の配慮を望んだこと(Ibid.,p.522.)などを想起することができる。また思想の観点からも、たとえば、『エミール』の主人公にも指物師という独立性の高い技術を学ばせたこと、あるいは、『新エロイズ』においてジュリから差し出された財布にサン・プルーが「恥辱」を感じ、ジュリに「名誉の支配はゆだねてはいない」と抗議する場面(N.H.,II, p.66.)などを指摘することができる。ルソーは、生活と思想の両面において理想的な時代への回帰を試みたのである。

『人間不平等起源論』の第二部によれば、自然人、自然状態の幸福は、私有の観念や支配と服従の関係などが生じるにつれて失われていく。一方で現実的存在としての社会人の

諸悪、不幸が浸透していくのである。ルソーは、社会人の不幸のひとつは「存在と外観」の不一致にある、とする。社会状態にあって人間は本来の自分自身から外に出て、他者の視座のなかで生きようとする。「未開人は自分自身のなかで生きているのに、社会人はいつも自分の外にあり、他者の意見のなかでしか生きることができず、いわば、他人の判断のみから、自分自身の存在感情を得ているのである」(Ibid.,p.193.)つまり社会人は「自分自身よりも他者の証言にもとづいて幸福になったり」(Ibid.)するのである。

ルソーはこのように、非現実的存在としての自然人の幸福と現実的存在としての社会人の不幸という論点を問題として提起することによって、思想家として重い課題を負ったといえる。何故なら、自然人の幸福がどれほど魅力的に描かれたとしても、それは現実の人間が享受することは決してないからである。それはあくまでも「仮説的で条件的な推理」なのである。また、同時代人の諸悪、不幸をいかに声高に糾弾したとしても、それは時代を救済する創造的建設的思想家のあり方ではないであろう。したがって、『人間不平等起源論』後のルソーは、不幸な状態にある(と彼が認識する)現実の人間存在に、いかにして自然人の幸福の諸条件を取り入れていくかといった課題を負わなければならなかったのである。

その課題を『エミール』では最初の部分で、「社会秩序のうちにあって自然の感情の優位を保存しようと欲するものは、自分が何を欲しているのか知らない。常に自分自身との矛盾に悩み、常に自分の性向と義務とのあいだで動揺し、決して人間にも市民にもなれないであろう」(Em.,IV, pp.249-250.)と表現し、その解決の困難さを読者に印象づけている。

「自然人は自分がすべてである」(Ibid.,p.249.)が、現実の人間は全体(社会)との関連で生きる相対的な存在であり、自分自身であり続けることはできない。しかし、自分に固有な性向と社会的存在として果たすべき義務のあいだの動揺を静めることができれば、すなわち人間であると同時に市民であることができれば、幸福は実現するのではないだろうか。「もし、人が自分に課する二重の目的がただ一つの目的に結合できるのなら、人間から矛盾を取り除くことによって、人間の幸福への大きい障害を取り除くことになるだろう。」(Ibid., p.251.)『エミール』は、その実現に貢献するための書である。「私は、この本を読んだあとでは、人はこうした探究において数歩を進めたことになるであろうと思う。」(Ibid.)表現は控え目ではあるが、ルソーは自信満々である。

ルソーは『エミール』において架空の少年エミールを登場させ、困難な課題解決のための思考実験を試みた。その教育方法は大きく二段階に分かれる。すなわち、エミールが思春期に成長するまでは、「徳や真理を教えること」よりも、「心を悪徳から、精神を誤謬から保護する」(Ibid.,p.323.)ことを強調した消極的教育 *l'éducation négative* が採用される。こうして、思春期まではエミールは、『人間不平等起源論』の自然人のイメージそのままに、「人間の社会にただ一人であり、自分一人だけしか頼りにしない」(Ibid.,p.488.)ような存在、そして「道徳的存在や社会的関係について、なに一つ観念をもつことはできない」(Ibid., p.316.), いわば「物理的存在 *un être physique*」(Ibid.,p.458.)として描写された。思春期以降は教育方法が逆になる。すなわち知的、道徳的教育が徹底されるのである。

エミールは「物理的存在」であればあるほど、『人間不平等起源論』の自然人に近接していく。そのような存在にさせるためには教師の役割は重要である。教師は、生徒(エミール)の眼には、すべてが自然の秩序のもとで進行するかのように配慮しなければならない。何故なら人為の関与に生徒が気づくことは、権威、従属、羨望、卑屈など諸悪の温床とな

るからである。ルソーが「事物の教育 l'éducation des choses」とも呼ぶ消極的教育の方法は、実は教師による、生徒には決してそうと気づかれてはならない絶対的な支配を前提としているのである。「彼（生徒）には自分が常に主人であると思いこませつつ、実は主人であるのは、あなたであるようにしなさい。自由の外見をもつものほど、完全な隷従はない。このようにして、意志そのものすらとりこにするのだ。何も知らず、何もできず、何も認められないあわれな子どもは、あなたの意のままではないか。」(Ibid.,pp.362-363.)」J. スタロバンスキーも指摘しているように、このような教師の生徒への完全な支配は、まさにその「意図が有害である場合を考えるならば、恐るべきものであるだろう。」⁶⁾しかしともかくルソーは、このような教育の方法を展開することで、少年エミールは15歳まで「自然が許してくれる限りにおいて満足し、幸福に、自由に生きてきた」(Ibid.,p.488.)と総括するのである。

ところで、エミールは「社会状態に生きる自然人」(Ibid.,p.483.)であり、成長を前提としない『人間不平等起源論』の自然人ではない。成長するにつれて、自分を他と比較する相対的な情念、利己愛（自尊心）l'amour propre が生じてくる。『人間不平等起源論』において、ルソーは、自然人に自己保存感情と結びついた唯一の情念、自己愛 l'amour de soi を認めた。その情念は他者の存在を考慮することのない絶対的情念であるが故に、それをもつことによって不幸になるということはないが、社会状態にあっては相対的な感情、利己愛が生じ、後者が人間の不幸の源泉となるとした。

成長したエミールは、他者の存在を意識することにおいて、「もはや孤立した存在ではなく、その心はもはや孤独ではない。」(Ibid.,p.493.) 他者を意識する思春期のエミールには、不幸の源ともいえる利己愛をどう支配するかという問題が生じている。この問題は、『エミール』第五編では、エミールとやがてその伴侶となるソフィとの愛の物語として論じられていく。そこでルソーは、利己愛という情念に打ち克つ力、「徳」を強調し、「有徳な人間 l'homme vertueux」になることが幸福への道と論じたのである。(cf.,Ibid.,p.818.)

3. 「コミュニケーションの限定」における幸福

現実の人間に、いかにして自然人のもつ幸福の条件を適用するかという課題は、『新エロイーズ』においても主要な論点の一つであった。『エミール』第五編と同様、大人同士の愛の物語である『新エロイーズ』は、恋愛において生じる情念（利己愛）をいかに抑制するか、すなわち徳をめぐる物語である。その小説で描写される、クラランと名づけられた小共同体を経営するヴォルマール夫妻とその使用人との関係は、『エミール』における教師と生徒との関係に類似している。すなわち、『エミール』の教師は絶対的な支配をそれと気づかれることなく生徒に及ぼしたが、『新エロイーズ』の主人側もまた、独裁的支配を巧妙な方法によって使用人に及ぼすのである。

その方法とは、たとえば主人側と使用人側がともにダンスに興じることであったりする。女主人公ジュリは次のようにサン＝プルーに説明する。「私はこの程をえた親しみが、従属の卑小と権威の厳しさを緩和して、自然な人間の情をいささかなりとも回復させる優しさと愛情の絆を、私たちの間につくると思うのです。」(N.H.,II, p.458.)つまり、主人側が自分の身分から下に降りて使用人たちと同列になりながら、後者は前者と「肩を並べようなどという気にはならない」(Ibid.)というわけである。クラランはまさに、「閉じられた、

秩序正しい、完全な宇宙であり、そこでは知恵と美徳が支配する。実際には、それは圧政的な社会」⁷⁾なのである。

このように、自然の秩序であるかのように見せかけながら実は人為的に構築された「圧政的な」環境のなかで、『エミール』の生徒や『新エロイズ』のクラランにおける使用人たちは幸福を享受するのである。この論理を押し進めていくと、『人間不平等起源論』第二部で説明されている不平等の最後の到達点に酷似するであろう。ルソーのよれば、不平等のこの段階では、「すべての個々人が、無であるから再び平等になり、臣民には支配者の意志以外にはもう法律がなく、支配者には自分の情念以外の規則がなく、善の観念と正義の原理が再び消えてしまうのである。」(Inég., III, p.191.) この状態は「極端な腐敗の結果」(Ibid.) であるが、その状態と最初の自然状態との間にはほとんど相違はない。もし、『エミール』の教師や『新エロイズ』のヴォルマル夫妻のように、支配する側に、限りなく神に近い誤ることのない全能の意志が働いているとするならば、支配される側は、最初の自然状態に生きる自然人と同様の幸福を享受するであろう。

ところで、幸福を享受しているのは少年エミールや使用人たちだけではない。そのような状況を演出している教師やヴォルマル夫妻も同じく幸福である。まず、エミールの教師についていえば、彼はエミールを幸福にすることで、自身も幸福になろうとしていたのである。この観点で『エミール』を読めば、その書は教師の自己教育論という性格をもつであろう。教師はエミールに次のように語る。「わが年若い友よ、私は生まれたばかりのきみを腕に抱き、最高存在を証人としてあえて約束を結び、きみの幸福に私の生涯を捧げたとき、私自身、なにを約束したのか、知っていたのか、いや、私は、ただ、きみを幸福にすることによって私も確実に幸福になれることを知っていただけだ。きみのためにこの有用な探求を行いつつ、私はこれを私たち共通の仕事にしたのだ。」(Em., IV, pp.814-815.) 『エミール』の最後の場面でも、幸福が「共通の仕事」の成果として達成されたことが強調されるのである。「この地上に幸福というものが存在するのなら、私たちが暮らしている隠れ家にこそこれを求めるべきなのだ。」(Ibid., p.867.)

個々人に特有の幸福が享受されるのではなく、「共通の仕事」という複数の人間の一体感によって生じる幸福は、『新エロイズ』においては、さらに強調される点である。すなわちルソーは、クラランでは各主要登場人物の間に、「共通の自我 moi commun」⁸⁾ともいべき一体感を存在させ、共同体の秩序を強化させている。たとえばサン＝ブルーは、ヴォルマル家の様子を、その家では「各部分の協調と組織者の意図の統一性を示す全体の美しい秩序」があると説明し、「均斉や規則性はだれの眼にも快いものです。充足と幸福を想起させるものは、それらを渴望する人の心を感動させます」(N.H., II, p.546.) と述べる。この状態にあっては幸福は個の問題ではない。「周囲の人々の幸福によって自分の幸福を考える」(Ibid., p.548.) のであり、『新エロイズ』では徹底的に利他的な幸福が強調されている。

しかし、「共通の自我」は究極のところ、その書においては一人の登場人物が代表し、すべてが収斂されていく。女主人公ジュリである。スタロバンスキーは、「ジュリは真に彼女をとりかこんでいる親密な社会の魂」と表現しているが、その女主人公は、まさにクラランという共同体の集団的幸福の象徴として君臨するのである。「ここでは世界は私のためにあります。(中略)私の本質は、私をとりかこむすべての人々のなかであり、私を離れたものは何もないのです。もはや私の想像力を働かせるようなものは何もなく、欲しいものも

ないのです。私は自分が愛するもののなかで生き、幸福と人生に充足しています。」(Ibid., p.689.)

このように、『エミール』や『新エロイズ』で描写される「共通の仕事」「共通の自我」としての幸福は、ルソーがかっていく度か体験した幸福でもあった。ルソー自身が『エミール』の教師や、『新エロイズ』のジュリの役割を果たそうとしたのである。そうした体験のなかでも典型的であるのは、若き日ヴァランス夫人のもとで、執事アネをまじえての三人の共同生活を回想している場面であるだろう。「このようにして、われわれ三人の間には、おそらく地上に例のないような一つの結合ができた。われわれの願望も、心遣いも、心情も、すべて共通であった。それらのどれ一つとして、この小さな範囲の外に出るものはなかった。一緒に生活し、他の人を入れずに生活する習慣が非常に強くなったので、食事のときに三人のうちの一人でも欠けたり、他の人が入ってきたりすると、何もかも狂ってしまうのだった。」(Conf., I, pp.201-202.) パリに出て無名の苦難の時代でさえ、テレーズと暮らす毎日、「二人がいかにお互いのためにつくられているかということを、日に日に感じ」ることによって、「弱い人間にできるかぎりの、もっとも完全な幸福を味わった」(Ibid., pp.353-354.)と回想するのである。

この二つの回想にも示されるように、ルソーが幸福であったとなつかしむ過去の特定の時期には、彼自身を含む人々が、その場の調和にそれぞれの役割を果たし、等分の幸福を享受するのであった。『マルゼルブへの手紙』では、犬までも等分の幸福の享受者であった。「私たち家族を結びつける思いやりを台無しにしてしまうような、隷属や従属を思わせるものはどこにもありません。私の犬にしてからが、私の友人ではあっても奴隷ではなかった。」(A Malesherbes, I, p.1141.)

ルソーはこのように利他的な幸福を、小さな社会（時にはテレーズと二人）のなかで、追い求めている。T.トドロフの表現でいえば、「コミュニケーションの限定」⁹⁾のなかでの幸福である。

おわりに——永遠の幸福

しかし、ルソーの境遇に時折到来する幸福の時期は永続しない。その作品上の登場人物もまた同様である。完全な幸福を得たはずの『エミール』の若い二人も、その続編とみられる未完の『エミールとソフィー——あるいは孤独な人々』では、悲惨な運命に翻弄される筋立てである。また、『新エロイズ』の結末もジュリの死であった。ルソーは、作品上では永続する幸福な結末を描くことができたはずである。そうしないのは、作品の登場人物に自身の境遇を重ねたのであろうか。

『夢想のための下書き』には次のような断片がある。「幸福はあまりにも恒常的な状態であるし、人間はあまりにも変わりやすいから、幸福は人間にはふさわしくない。」(E.R., I, p.1166.)『孤独な散歩者の夢想』には無常観が漂っている。私たちが周囲に愛着をもったとしても、私たちもその周囲も必然的に移り行き変化する。「この地上では、すべてが絶えざる流転のうちにあり」ので、「永続する幸福などといったものを、この世で味わうひとがあるとは思わない。」(Rêv., I, p.1046.) 最晩年のルソーの心象風景にこのような思考が広がっていたのであるが、しかし『新エロイズ』や『エミール』においても同じ趣旨が語られている。すなわち彼は、ジュリに、「恒久不変の状態は人間にふさわしいのでしょうか？」

(N.H.,II, p.726.)と語らせ、「この世には真の幸福はありません」(Ibid.,p.513.)と断言させた。また、『エミール』では、他者に愛着を持たざるをえない人間の弱さを指摘し、「こうして私たちの弱さそのものから、私たちのはかない幸福が生まれる。真に幸福な存在は孤独な存在である。つまり神のみが絶対の幸福を楽しむ」(Em.,IV, p.503.)と、人間には幸福の永続性は望むべくもないと論じたのである。

このように、ルソーにおいては幸福は、それが人間の生という時間的経過のなかで語られるときは持続性もつ「真の幸福」ではなく、「はかない幸福」にすぎないのである。しかしルソーは、現在を永遠と一体にしたような、時間を超越した体験を何度かもつことができた。『孤独な散歩者の夢想』の「第二の散歩」で語られている馬車と衝突したあとの意識が回復していく場面、あるいは「第五の散歩」で回想されているサン=ピエール島滞在時の湖上での体験などがそうである。ルソーはしばしば夢想到に耽った。そのようにすることで時間を超越し、「はかない幸福」を永遠の幸福にすることを試みたのである。同書の最後である「第十の散歩」はヴァランス夫人の追憶でとぎれているが、その時もルソーは、幸福であった時代の夢想ということと、夢想自体の幸福ということの二重の幸福に浸っていたのであろう。

注

- 1) 拙著『ルソーにおける孤独の諸相』（『教育学研究紀要』 明星大学教育研究室編 第10号 1995 pp.29-36 所収）
- 2) 本稿に引用したルソーの著作は、プレイヤード版 J.-J.Rousseau OEuvres complètesを参照した。なお、タイトルを以下のように略記し、そのあとにプレイヤード版の巻数を指示した。
Inég., Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité
N.H., La nouvelle Héloïse
Em., Emile
F.P., Fragments politiques
A Malesherbes., Quatre lettres à M.le Président Malesherbes
Conf., Les confessions
Dial., Rousseau juge de Jean Jaques
Rêv., Les rêveries du promeneur solitaire
E.R., Ebauches des rêveries
なお、訳は白水社版『ルソー全集』を参照し、一部修正を加えた。
- 3) J.=L.ルセルクル著 小林浩訳 『ルソーの世界』 法政大学出版 1993 p.26
- 4) 『ルソーにおける孤独の諸相』 前掲書 pp.29-30
- 5) 『ルソーの世界』 前掲書 p.27
- 6) J.スタロバンスキー著 山路昭訳 『透明と障害』 みすず書房 1973 p.348
- 7) 『ルソーの世界』 前掲書 p.246
- 8) 『透明と障害』 前掲書 p.138
- 9) T.トドロフ著 及川稔訳 『はかない幸福——ルソー』 法政大学出版 1988 p.71